# 教育実習を終えて

日本語日本文学科　４回生
澤　田　愛　子

母校での三週間の教育実習はあっという間でしたが、学ぶことの多い、とても濃い三週間でした。

一週目は気を張りすぎたのか、体調を崩してしまい、先生方や生徒達に迷惑をかけてしまいました。生徒達と早く仲良くなりたいと思っている時に体調を崩したので、給食も別室で食べさせてもらうことになり、いきなり生徒達と関わる時間が減ってしまい焦っていました。しかし、先生方は体調を心配して、様々なフォローをしてくださいました。生徒達もガラガラ声の私に、「本当は持ってきたらあかんねんけど、辛そうだったから」と、市販の喉薬や喉飴をくれたり、授業の時に聞きづらい私の説明を真剣に聞こうとしてくれました。他の実習生達にも助けてもらい、周りの優しさに支えられながらなんとか一週目を踏ん張りました。

二週目は遅れた分を取り戻そうと張り切っていました。しかし、授業が思うようにできずに苦しみました。授業中に伝えなければならない事と、補足事項の判別ができておらず、詰め込みすぎたり、逆に授業の目標の設定を低くしすぎて時間が余ってしまったりで、生徒達が混乱してついてこられていないと指摘を受けました。また生徒達からは、「先生の説明は難しい単語が多くてわからない」と言われてしまいました。また板書の量が多く、消すのも早いこと、色が少ないので見にくいことを、指導教員と生徒両方から指摘を受けました。なかなか思うようにいかず、授業をするのがとても嫌でした。その時、クラス担任の先生に「話を聞こうとしてくれている生徒はちゃんと居る！」と励ましていただき、もう少し頑張ろうと活力が湧きました。

三週目は、やっと慣れてきたころに別れが近づいてきた寂しさでいっぱいでした。少しでもたくさんの思い出を作ろうと、休み時間や給食の時間をできるだけ生徒達と過ごしました。また、部活の時間に各部を回って生徒達に声をかけました。最後の授業の後には、「ありがとうございました！」と直接言ってくれた生徒や、いつもは発表しない生徒が、私の最期の授業だからと頑張って発表してくれたことにとても感動しました。

失敗ばかりの教育実習でしたが、その分たくさんの事を経験し、学ぶことのできた三週間でした。授業の難しさ、生徒に注意する難しさ、集団をまとめ、全員に指示する難しさを知りました。そして、生徒と関わる楽しさ、教師のやりがい、教える喜びも知りました。この経験は、私のこれからの教師人生の武器になると思います。三週間で経験した感動や苦しみを忘れずに、進化を続けられる教師になりたいと思います。そして、いつか母校で教壇に立ちたいと思います。

# 教育実習を終えて

英語英米文学科　４回生
岩　﨑　汐　莉

私は母校の中学校で三週間の教育実習をさせていただきました。実習前に、教科担当、クラス担当の先生方と打ち合わせができなくなるといった、ちょっとしたハプニングがあったことから、大きな不安を抱えての初日を迎えることになりました。しかし、多くの人に支えられ、やりきることができました。

私の担当クラスは一年一組で、授業は一年の全クラスと二年生の半分でした。明るく元気いっぱいだけれど、授業はきちんとした態度で受けられるきちんとメリハリをつけることができる生徒が多かったです。最初こそ、緊張でなかなか上手くコミュニケーションをとることができなかったけれど、自分から積極的に話しかけるようにしたことで、多くの生徒と打ち解けることができました。その際には、事前に注意されていたこともあり「あくまでも教師の立場で接すること」ということに気をつけました。そのおかげもあり、授業では生徒との適切な距離感を保つことができ、スムーズに授業をすることができました。

授業については、一週目は主に指導教官の授業を見学させていただき、どのような授業を行っているかを知ることから始まりました。一年生では、ＡＬＴを含めた三人の教師で一クラスを担当する珍しいタイプの授業でした。また、二年生は一クラスを半分に分け、同時間に別々の部屋で違う教師の授業を受けるといったものでした。このように個々への支援に重きをおくことができる授業をしていました。二週目から実際に授業実習を行いました。最初は緊張から、予定通りに進めることができずぐだぐだになってしまったり、ＡＬＴとの連携がうまくいかなかったりと大変でしたが、多くのことを学ぶことができました。例えば、使用するチョークの色に気をつけることや、プリントを配布するタイミングを考えること、そして生徒の当て方にも工夫が必要なことなど、指導教官から指摘されたことで、初めて知ることが多くとても参考になりました。また、自分の課題も明確になったりと、沢山のことに気付くことができました。そして三週目に入ると、これまで学んだことに気をつけて授業をしました。その結果、研究授業では自分の一番満足できる授業をすることができ、指導教官からも良かったと言ってもらえました。また、自分の担当教科以外に、道徳の授業もさせていただきました。これは専門科目ではないので、より多くの教材研究が必要だと感じました。また、部活動にも参加させていただき、改めて教師という職業は体力が重要だと実感しました。

そして学級経営に関しても多くのことを学ぶことができました。毎日のＳＨＲでは連絡事項を伝えるとともに時事ニュースに関する話をするなど、幅広い知識を持っていた方がいいということを感じました。

三週間という期間は長いようであっという間に過ぎていったように感じました。私にとっては、毎日学ぶことが沢山あってとても充実した教育実習でした。それもこれも、つたない私の授業についてきてくれた生徒達や、指導教官はもちろんのこと、それ以外の全ての先生方がいつも熱心に指導して下さったおかげだと思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。今回の実習で学んだことを活かし、教師になる夢を絶対にかなえたいと思います。

# 教育実習を終えて

神戸国際教養学科　４回生
角　谷　美　緒

母校である中学校で、３週間の教育実習をさせていただきました。配属クラス、授業担当クラスともに３年生となり、受験年の大切な時間に実習させていただくということから、不安とともに気が引き締まりました。

毎日がめまぐるしく過ぎていった３週間で学んだこと、すなわち、将来教壇に立った時に大切にしたいと思ったことが、大きく分けて２つあります。

１つ目は、“授業作り”です。実習中は、提出物点検や連絡ノートのコメントなど、教壇に立つこと以外の仕事も体験させていただいたので、休み時間や空き時間もなかなか教材研究に充てることができませんでした。そのため、慣れるのと同時に、より専門的で生徒主体のメリハリのある授業が求められる中で、自分の知識不足や経験不足を痛感しました。特に２週目は、最も悩み苦しんだ期間でした。教えることに自信が持てず、私だけでなく生徒にとっても、つまらない50分になっていたと思います。そんな時に、指導教員からの「教師を演じなさい」という助言から、生徒は教員の心情や様子を敏感に感じ取るので、自分自身と教室全体の雰囲気作りが大切だと知りました。休み時間との切り替えを促すことに始まり、授業中の生き生きした表情や言動、興味関心をそそる発問や生徒が主体となって思考する時間を設けることなど、教師が50分間にできること、やるべきことというのは、こんなにも沢山あるのだと気付かされました。また、毎日、毎時間、どんな些細なことでもいいので変化や工夫を加えることも大切だと感じました。研究授業では、少しは“教師を演じる”ことができたかなと思います。しかし、最後まで課題として残ったのが、“生徒が参加できる授業”を作ることでした。反省会でも、発問するだけでなく、生徒個人で思考する時間や、それを他の生徒と共有する時間を取ることで、生徒たちの考えがより深まると教えていただきました。また、教科書の内容を流れに沿って教えるのではなく、50分間で何を一番生徒に伝えたいかという“ねらい”をしっかりと持ち山場を作ることで、記憶に残りやすくなるという助言もいただきました。このように、実際の教育現場で授業実習を多く経験し、反省を踏まえたくさん悩み考えることができて良かったです。

２つ目は、“生徒との関わり”です。事前の諸注意では、教師は生徒に対して区別ある接し方をしなければならないと言われました。ただ仲良くなるのと、絆を深めることは違うということです。初日から、自ら進んでアプローチすることを心がけた甲斐あって、すぐに生徒と馴染むことができました。その一方で、生徒に嫌われることを恐れて、叱ることから逃げてしまうこともありました。そんな時、指導教員に、時には毅然とした態度で悪いことを正し、聞く耳を持ってくれない生徒に対しても忍耐強く向かい合わなければならないと言われました。些細なことでも教師が目を瞑ってしまうと、当事者はもちろん、周りの生徒にも不快な思いをさせてしまうので、実際に現場に立つ際には、粘り強く真剣に向かい合いたいです。また、この実習期間中に、事務作業や部活動、清掃・給食指導などを通して生徒と触れ合う中で、教員の仕事は授業をすることだけではないのだと知りました。授業だけでなく、授業以外での関わり方も、生徒との絆を深めることに大きく影響します。元気よく笑顔で挨拶することやベルスタ（チャイムと同時に始業できるように準備すること）、給食の準備、整理整頓・掃除などを、“まず自分から”真摯に取り組むことで、生徒にもその行動や態度が伝染することを実感しました。私の配属クラスには、

一際ヤンチャな女子生徒がいました。彼女は、給食にも掃除にも来ないし、もちろん私の授業にも参加したことがありませんでしたが、挨拶すると必ず返してくれ、楽しそうに会話もしてくれました。だから、私は、挨拶を始め積極的に声をかけ続け、何でも「一緒にやろう！」という姿勢で接しました。そして、私の最後の授業の直前に、「先生、今日で最後なんやろう？先生、頑張っとるし、私も授業出るわ！」と言って、初めて授業に来てくれました。それだけでも十分に嬉しかったのですが、授業中の私の発問にも、一生懸命応えようとしてくれました。彼女に声をかけ続けて、そして、実習を自分なりに精一杯取り組んで本当に良かったと心から思いました。この思い出は、きっとこれからも私の心の中で生き続けると思います。今後も、“まず自分から”という姿勢を大切にしたいです。

この３週間で、たくさん失敗し、悩み、考えた中で、少しは精神的に成長できたのではないかなと感じています。正直、辛くて逃げ出したくなった時も多々ありました。そんな時に私を奮い立たせてくれたのは、親身になって指導して下さる先生方や、弱音を受けとめながらも叱咤激励してくれた家族、そして何より、こんな私を「角谷先生！」と慕い、授業に参加してくれた生徒たちの存在でした。多くの方に支えていただき、無事３週間の実習を終えることができました。今後、困難にぶつかることもあるかもしれませんが、その時は教育実習を思い出し、前向きに取り組もうと思います。実習記録や毎日書き込んだメモ帳、配属クラスの皆からもらったメッセージは、私の心の中に残る思い出とともに、今後の教員生活の糧となる一生の宝物です。

# 教育実習を終えて

史学科　４回生
望　月　綾　乃

きらきらした、楽しかった記憶として残っている教育実習。私は、姫路市立の中学校で三週間、貴重な時間を過ごさせていただきました。

母校ではなく、また私個人にとっては、はじめて男女共学の公立中学校に足を踏み入れての実習ということで、最初はとまどいや不安もありました。私はまず、実習校で行われていた「あいさつ運動」だけでなく、廊下ですれ違う時など、目を見てしっかりと挨拶をすることを心がけました。実習校の生徒たちは明るく素直で、挨拶に元気に応えてくれ、進んで話しかけてくれる生徒も多くいたので、多くの生徒と関わることができました。日が経つと、生徒も実習生に慣れてきますが、メリハリをつけて毅然とした態度で接するよう気を付けました。また、楽しく関わるだけではなく、注意や声かけの必要な場面もあり、適切な声かけについて考えさせられました。嫌われたくない、といった気持ちから注意することを迷ったこともありましたが、最後に「注意をしてくれた実習生の先生は初めてです」と生徒からコメントをもらい、少しでも私が生徒に伝えられたことがあったのだと嬉しくなりました。

授業は実習三日目からスタート。はじめは大学の授業でも学んだ、見通しとふり返りを大切にすることや板書の方法、説明の仕方なども、まだまだ足りない部分が多いことに気付かされました。また、クラスや授業時間によって、生徒たちの反応が大きく変化し、それぞれに興味を持って意欲的に取り組んでもらえる授業づくりが必要であると感じました。先生方の授業を見学して生徒を引き付けるテクニックを学んだり、指導教諭に指摘をいただいたりしたことを参考にし、課題の解決に努力しました。生徒たちの「わかった！」という言葉は私にとって何よりも嬉しいもので、授業がうまくいかず挫けそうになった時も、生徒にもっと伝えたい、教えたいという気持ちで乗り越えることができました。三週間を通して、自分が「与えたい」と思うことをしっかり持って生徒に接することの大切さを感じました。与えたいものは何なのか、深く考え、自分自身もその理想に近づいていくことができるよう価値観を高めていきたいと思います。

三週間、先生方にはたくさん指導していただき、試行錯誤しながら一生懸命取り組むことができました。まだまだ課題も多くあり、教員の仕事のほんの一部分を体験したに過ぎない未熟な私ではありますが、この三週間の実習をやりきったことは確実に糧となり、そして自信となっています。素晴らしい体験をさせてくださった実習校、私に関わり、励ましてくださったすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。この三週間で得たたくさんの宝物をしっかり心にとめて、これから夢に向かって進んでいきます。

# 教育実習を終えて

教育学科　３回生
神　野　美　穂

一か月の実習を振り返ると、あっという間の一か月でした。しかし、実習前に目標を立てることにより、一日一日を大切に、教育実習を行えました。そこで、実習前に立てた目標から実習を振り返りたいと思います。

一つ目の目標は、「責任と自覚を持って行動する」ことです。実習では貴重な体験をさせてもらいました。授業だけではなく、職員研修で発言したり、教案審議に参加したり、教職員の方々が学ぶ機会をたくさん与えてくれました。「失敗したらどうしよう」と思うときもありましたが、経験しないと実習前と何も変わらないと思い、「やってみよう」と自分から進んで行動するように心掛けました。徐々に教師としての責任と自覚が芽生えているように感じました。

二つ目の目標は、「教職員の皆さんと良好な人間関係を築く」ことです。実習のはじめは、自分から話しかけると作業の邪魔をしてしまうと思い、なんでも自分で解決しようとしていましたが、途中で、それでは実習の意味がないと感じ、些細なことでも尋ね、確認するようにしました。すると、次第に先生方が話しかけてくれるようになりました。また、先生方から「休む時は休みなさい」と言われており、私は家に持ち帰って作業をするということはあまりしませんでした。基本的に学校で次の日の授業の準備を終わらせてから帰宅し、家では復習と予習を軽くするだけでした。そのため、帰宅時間が遅くなることもありましたが、職員室で作業をしていると、他学年の先生と交流ができ、私は放課後も楽しみの一つでした。その交流のおかげで、研究授業では、指導担当の先生に限らず、他学年の先生たちが板書から発問まで、どうするのが一番良いか、わかりやすいかを一緒に考えて下さいました。

三つ目の目標は、「児童の実態に即した指導方法や指導技術を体得する」ことです。私は算数の倍について授業をしました。倍を表すときに「○は△の何倍で、△は□の何倍になる」というように、「…は～の何倍」と一貫性のある授業を心掛けました。研究授業では、ノートに自分が話す言葉を一言一句書き出し、何度も先生たちの前で模擬授業を行いましたが、研究授業は自分が考えた通りに児童が発表し、答えてくれません。そのため、模擬授業では何通りも考え方や児童の様子を想定し、机間指導を含めた声掛けの仕方など何回も先生方に確認し、練習をしました。研究授業では、想定外の出来事も多々ありましたが、模擬授業で授業の流れは頭に叩き込んでいるため、大幅に脱線することはありませんでした。

最終日には、児童がお別れ会をしてくれました。「絶対、教師になってね」と言われた時、鳥肌が立つ程嬉しく、絶対に教員採用試験に合格し、愛媛で働きたいと思いました。指導担当の先生が「実習はじめの時よりも、いい表情になったね。」とおっしゃってくれました。私にとってこの一か月は毎日が楽しく、児童から元気をもらえた一か月でした。今度は私がみんなに元気を与えられる教師になれるように、実習で学んだことを生かしていきたいと思います。

# 教育実習を終えて

教育学科　３回生
藤　井　晴　美

教育実習を終えて、私は教師になる「覚悟」を持ちました。20日間という長いようで短い実習期間の中で、教師のやりがいや楽しさを感じたとともに、教師という仕事量の多さや教師の深さ、難しさを実感しました。私が教師を目指した理由は、「児童を育てたい」という強い思いからです。そう思うのは、私を変えてくださった恩師の存在です。失敗を恐れず自分を表現すること、友達を大切にすること、人としての心をもつこと、たくさんのことを学ばせて下さったその恩師のように、私も児童を変えたいと思うようになりました。授業作りへの不安もあったけれど、「児童を育てる」という思いをしっかりと胸におき、教育実習に臨みました。そしてこれらを踏まえて、教育実習を通して学んだことを二つ述べます。

一つ目は、「児童を育てる」ことの難しさです。私が担当したクラスの児童に、すこし障害があり、人との関わりを避ける児童がいました。私はそれに気づいた時、私から関わることで児童を支え、少しでも自分の良さに気づき、児童が自ら周りと関わろうとしてくれたらと思い、毎日声を掛けるよう心掛けました。その結果、その児童は私には心を開いてくれました。しかし、周りの児童に対する関係性は変わりませんでした。その時、「児童を成長させたい」という思いは強くても、そうする方法がわかっていなければ、意味がないのだと実感しました。教師になりたいという思いだけでは駄目で、児童を変えるためには自分は今どう行動し、どう言葉かけをしなければならないのか意図をもっておく必要がありました。今まで、実際にスクールサポーターや学童保育、ボランティア等いろいろな現場に行き、児童と関わろうと意欲的に取り組んできました。しかし、児童と関わることは出来ても「児童を育てる」という意味で自分は動けていたのか分からなくなりました。

二つ目は、授業のあり方です。私は以前まで、児童を育てるのは道徳の時間や特別活動等の国語や算数といった授業以外のものであると考えていました。しかし、実際はそうではなく授業の中で児童を育てるのであると実感しました。そのために、教師は授業の中に児童同士が話し合う活動、自分の意見を発表する活動等、いろんな活動を盛り込み、児童たちが作っていく授業作りにする必要があることに気づかされました。もし教師がその活動を怠り、楽をすれば、児童の育つ授業ではなくなってしまいます。だから、教師という仕事は単純な気持ちのまま教壇に立ってはいけないと感じました。

「児童を育てたい」のであれば、児童と正面から向き合い、時にぶつかりあいながら児童と関わり、そこからどう教師が児童を育てようと動くのかが大切があることに気付かされました。それは自分が考えるよりもとても難しいことで、大変なことです。しかし、私は教師になりたい気持ちも、「児童を育てたい」という思いも変わりません。だから、そのために私のすべき方法をしっかりとみつけたいと考えています。教師という仕事は楽しいこともあれば、悩みも多い仕事です。しかし、私はそんな教師という仕事に「覚悟」を持って、教育実習生としてではなく教師として、教壇に立てるよう今後教員採用試験に向けて勉学に励みたいと思います。

# 教育実習を終えて

教育学科　３回生
磯　﨑　亜里果

私にとって教育実習は、あっという間の４週間でした。この実習を通して様々なことを学びましたが、その中でも運動会という大きな行事を終えることができたのはよい経験となりました。運動会で学んだことは大きく分けて３つあります。

１つ目は運動会における先生方の想いです。これは教師の立場になって初めて気づくことができました。主役は児童であり、どのようにしたら一番よくなるかなど放課後によく話し合われていました。私も先生方と同じように運動会をすばらしいものにしたいと思っていたので、私なりの考えを先生方に伝えられるように努力しました。

２つ目は準備の大変さです。グラウンドの整備など、練習期間も毎朝早くから準備されており、子どもたちの分からないところでの努力がたくさんあると感じました。準備は全職員が協力してする必要があり、運動会は先生方のよいチームワークがあってこそ成功するのだと感じました。

３つ目は児童の成長を見守るということです。運動会を練習のときから見守り、子どもたちがこの運動会を通して協力することの大切さを学んだり、クラスの絆を深めたりしていることがよくわかりました。これは運動会をする目的のひとつでもあり、子どもたちがどのように成長したのかを認めることが大切だと感じました。

運動会当日、それぞれの競技に本気で取り組む子どもたちの姿を見て、嬉しく思うと同時にとても感動しました。子どもたちの成長を目の当たりにし、教師という職業のすばらしさを感じるとともに、一緒に運動会を成功させることができて本当によかったと思いました。

運動会があったため、あまり多くの授業をすることはできませんでしたが、時間があれば少しでも授業をさせていただくことができたので、本当にいい経験をさせていただけました。教材研究など、１時間の授業をするだけでも、考えなければならないことがたくさんあり、教師の大変さを身にしみて感じました。しかし、それなりにやりがいがあり、児童が理解してくれた時はとても嬉しく、本当にいい職業だと感じました。授業をする上では、教材研究の大切さ、事前に主発問を考えておくことの大切さを学びました。そして、何より大切なのは児童理解だと感じました。わたしは毎日挨拶立番を行い、少しでも子どもたちと信頼関係を築こうと努力しました。毎日挨拶することで担当学年の子どもたちだけでなく、全校生と関わることができ、挨拶の大切さを実感しました。

先生方の動きを見ていると、どの先生方も周りの様子を瞬時に読み取り行動されていることが分かりました。常に周りの様子を把握し、対応する力が必要だと感じ、対応力のある教師になりたいと思いました。実際に、教育実習中も喧嘩を仲裁しなければならない時があり、とっさに行動することの難しさを感じました。喧嘩の仲裁では、双方を納得させることが一番大切だと、先生方の行動から学びました。

この教育実習は受け身ではなく、能動的にすることが大切だと感じていたので、何事にも積極的に取り組もうと努力しました。運動会の準備や練習、そして授業も積極的に取り組んだことで、とても充実した４週間を過ごすことができました。これは、常に、自覚と責任をもち、先生だという使命感をもって行動したからだと感じます。改善点や課題もたくさん見つかりましたが、子どもと関わる楽しさ、授業をすることの達成感などを味わうことができ、教師になりたいという思いがより強くなりました。これからさらに人間力を高め、少しでも理想の教師に近づけるように、何事にも全力で取り組みたいと思います。

# 教育実習を通して

教育学科　３回生
落　合　佐　紀

自分が小学校の時に実習生として来てくれた先生のことを思い出しました。先生はいつも笑顔で楽しそうで、小学校の時から「学校の先生になりたい」と考えていた私は、その頃から「自分もきっとここで教育実習をするんだろうな」と思い描いていました。

そして実現した母校での実習。まず、思い描いていた先生像と現実との「違い」を実感し、改めて先生方や当時の実習生は「すごい」と思いました。自分の考えの甘さを痛感し、もっと勉強をする必要があると感じました。私は、45分の授業をするために何時間も悩むとは思っていませんでした。頭の中では「今日こそはうまく授業を展開していけそう」と思っていても実際は予想と違い、「前回よりはうまくしたい」「どうしたら児童にうまく伝えられるだろう」と考えれば考えるほど、複雑になり授業のポイントが分からなくなりました。本当に難しかったです。しかし、指導教員は、「やってみて。やってみて分かることもあるから。だめだったら、ちゃんと立て直すから。」と言って、たくさんの授業をさせていただきとても勉強になりました。実践の機会をたくさん与えていただき感謝しています。

児童との関わりからは、コミュニケーションを取ることの難しさを学びました。実習をするまでに、私は子どもたちと関わるボランティアをしていたので、児童に関わることに不安はあまりありませんでした。しかし、実習当初は児童とコミュニケーションをうまくとることができず、とても悩みました。実習が２週目に入ると、少しずつ児童と話が出来るようになり、この頃から実習が楽しくなり始めました。私のモチベーションは「コミュニケーションをうまく取ることができる」ことがポイントなのだと知りました。会話の途中で児童が笑顔になったり、児童から話しかけてくれたり、自分の名前を呼んでくれたりと本当に嬉しかったです。その度に、「もっと頑張ろう」と前向きな気持ちになりました。児童には、本当に感謝しています。

先生方からは、今後磨くべきこと、自分の弱いところ、授業のポイントなどたくさん指導していただきました。特に、授業のポイントをたくさん教えていただき、とても勉強になりました。指導していただいたことを、なかなかうまく実践できず悩むこともありましたが、今後は学んだことを活かし、うまく実践できるよう、自分自身を高めたいと思っています。

最後に、小学校の頃からずっと思い描いていた母校で実習ができたこと、小人数の小学校で実習ができたこと、たくさん授業をさせてもらったこと、たくさん悩んでうまくできない自分に悔しくなったこと、そして児童の笑顔を見ることができたことなど、全てが私にとってプラスになったと思っています。目標としていた「積極的に明るく元気に行動する」ということはできませんでしたが、それ以上に毎日が新しい出来事ばかりで充実しており、とてもよい経験となりました。学んだこれらの経験を、将来の自分に活かしていきたいと思います。

# 幼稚園教育実習を終えて

教育学科　４回生
中　山　美　咲

私は、この４週間の教育実習でたくさんのことを学びました。実習が始まるまでは子どもと接する機会が多くあったわけではないので緊張と不安しかありませんでしたが、子どもたちの元気いっぱいな笑顔をみると少しずつ緊張はほぐれていきました。

そして、保育者の言葉かけは子どもたちが活動の意欲を高めるための重要な意味をもつことを再認識しました。中心活動だけでなく、自由遊び後のおもちゃの片付けでも保育者の言葉かけひとつで子どもたちの動き方が変わることを感じることができました。

また、私は４歳児のクラスに入らせていただいたのですが９月の新学期ということで今まで先生にやってもらっていたことを少しずつ自分でできるように指導することが難しかったです。手を貸しすぎてもいけないし、初めてすることに戸惑って「うまくできないからやりたくない」と投げ出す子もいました。でも無理やり強要するのではなく最初は自分でやってみようとする意欲を褒めるようにしました。するとそれを見ていた他の子どもたちも自分でやり始めて「先生見て！自分でできた！」と見せに来る子が増えたので子どもたちにとって褒めてもらえるということは「頑張ろう」という気持ちにつながるということが改めてわかりました。

そしてもう一点重要だと感じたのが命を預かっているという責任感をもちながら常に視野を広くして保育をしなければいけないということです。たとえば「園外保育に出たときは歩道を歩く」「広がって歩かない」交通ルールとして当たり前のことではありますが園外保育といういつもと違う環境に興奮している子どもたちは目の前に飛び込んでくる景色を見ながら歩くことに頭がいっぱいで、一つのペアが広がって歩くとその後ろも広がって歩いたり間が開いてしまったり…。しかし目配りしなければならないのは当然そこだけではなく全体を見なくてはならないのです。その点がとても大変でした。

教育実習最終日は、「中山先生本当に今日で最後なん？」「ばいばいしたくない」と泣いて抱きついて離れない子どもがいたり、手紙をもらったりして子どもたちと信頼関係が築けていたことを実感しました。

この４週間の幼稚園教育実習から幼稚園教諭の仕事はとても大変であることを体感しました。しかしそれと同時に幼稚園教諭の仕事は子どもたちの成長を間近でみることのできるとてもやりがいのある素晴らしい仕事でもあると思いました。４週間で学んだたくさんのことを忘れず、質の高い幼稚園教諭になるよう努力を惜しまず精進していきます。

そして最後に貴重な実習にさせてくださった幼稚園の先生方、子どもたちに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

# 幼稚園実習を終えて

教育学科　４回生
竹　内　愛加里

私は、１年間を通して２週間に１度、大学付属の幼稚園で教育実習をさせていただきました。私は５歳児クラスに入らせていただき、多くの大切なことを学ぶことができました。最初は、長期実習に不安もありましたが、明るく元気な子ども達や、熱心に指導していただいた先生方のおかげで、とても充実した実習となりました。２週間の保育実習とは違い、長期的に子ども達と関わることで、日に日に成長していく子ども達の姿を感じることができ、私自身も成長することができました。実習を通して学んだことの中で特に大切だと思ったことを述べたいと思います。

１つ目は、保育者の言葉がけや援助です。子どもが主体的に活動できるように、自分でできることは見守り、困難なことは挑戦できるように言葉をかけたり援助したりすることの大切さを改めて実感しました。私も実際に部分保育や研究保育をしてみて、保育者の言葉がけや援助で、子どもが興味・関心をもち、自分からやろうとする意欲を高めることができ、また友達同士で遊びを創りだしていくのだと感じました。言葉がけの仕方もいろいろありますが、特に子ども達の思いや遊びの状況に応じて、共感したり、提案したり、一緒に考えたりしていくことが大切だということを学ぶことができました。

２つ目は、子どもの小さな成長や変化にも気付き、その時の子どもの気持ちに寄り添っていくことです。例えば、竹馬の練習で、ちょっとしか乗れていなかった子どもが、次の実習の時にはすらすらと歩けるようになっている姿を見ることができました。２週間という短い期間の中でも日々成長していて、その成長した姿や変化を見逃さずに子どもと共に喜び合うことで、子どもの自信にもつながるということを感じました。

３つ目は、チームの実習生と連携して実習に臨むということです。１クラスに４人ずつ入り、指導案作成から当日の実習まで、話し合いを重ねる中で、自分とは違う価値観に触れることができました。また、保育をする際には、４人で考えた指導案で、主で保育をする人と補助でサポートする人に分かれて実習をしました。客観的に自分達の保育を見ることによって、反省点や課題点が見つかり、次の保育に生かすことができる深い学びとなりました。

この１年間の幼稚園実習で、幼稚園教諭の仕事の大変さややりがいに改めて気づくことができました。この実習で学んだことをこれからの自分の保育にも生かしていきたいです。たくさんの貴重な経験をさせてくれた子ども達、お忙しい中丁寧に指導してくださった先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

# 教育実習を終えて

家政学科　４回生
堀　江　由起子

私は母校の中学校で３週間の実習をさせていただきました。不安と緊張から始まった教育実習でしたが、母校での３週間はあっという間で、とても充実した日々でした。私は実際に現場で３週間過ごす中で、大きく分けて２つのことを学びました。

まず１つ目は「生徒理解の大切さ」です。１週目は、中学生とどのように接していけばよいのか全然分からず、とても戸惑いました。しかし、待っているだけでは駄目で、自分から生徒と関わりを持たなければならいということに気づかされました。そこで、２週目以降は、授業以外でも休み時間や昼食時、掃除の時間や部活動を通して、できるだけ生徒と関わるようにしました。授業はもちろん、学級活動や特別活動など全て主役は生徒であり、教師が一方的に作るものではありません。より良い授業や学校行事、学校を作っていくには何よりも生徒をきちんと観察し実態を理解することが大切だと感じました。そして、このことから、生徒一人ひとりをよく見て知ろうとする、そしてそこから人間関係を築いていくことで、生徒との「信頼」も生まれてくるということを学びました。

２つ目は「教材研究の大切さ」です。大学では模擬授業を行っても、相手は大学生なので質問してもすぐに答えが返ってきます。そして、みんな教職の講義を受講しているだけあり、質問後の展開の流れを汲み取り教師役が求めている回答をくれるので、スムーズに進めることが出来ます。しかし実際の生徒相手だと、そううまくは進められません。私は設問や授業の流れをノートに記し、細かい部分の確認もしてから授業に臨んでいましたが、私が留意していなかったことも生徒から質問される、欲しい答えがなかなか出ない、という場面が多々あり、その状況に上手く対応できませんでした。授業後には担当の先生と反省を行い、次のクラスの時には改善していくことになりますが、「生徒にとっては取り返すことのできない貴重な１時間」であり、最初の単元が当たるクラスの時でもベストな内容を生徒に伝えることが出来るように準備をしなければならないということを痛感しました。この経験から、様々な状況に臨機応変に対応できるよう、幅広い知識を身につけておくことが大切であるということを学びました。

私は３週間の実習の中で、多くの方々に支えて頂き、「教師」という仕事の魅力を強く感じました。それと同時に自分の未熟さがよく分かりました。しかし、教師が本気で関われば、その分生徒から素直に返ってくるものだと学ぶことができました。恵まれた環境の中で教育実習をさせて頂くことができ、感謝の気持ちで一杯です。先生にとっても、生徒にとっても貴重な時間を頂き、教育実習は私にとって忘れられない密度の濃い３週間となりました。今後もこの経験を活かし、日々成長できるよう努めたいです。

# 栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程　４回生
小　林　　歩

５日間という短い期間でしたが、貴重な経験となり、私にとって大きな一歩を踏み出すことができました。

母校の小学校は給食センター方式であり、調理の現場を見ることは出来ませんでしたが、研究授業や授業参観を中心に、２年４組をはじめ、多くの時間を児童と触れ合い、とても充実した日々を過ごすことができました。

研究授業では、無事45分間を終えることができるのか、不安しかありませんでした。実際に教壇に立つと、頭が真っ白になることもありましたが、クラスを見渡すことができる余裕が持てるようになった時に授業を楽しむことができました。積極的に質問する児童が多く、“栄養”に興味を持っている嬉しさを感じると共に、私自身、もっと教材研究をする必要性があると痛感しました。

栄養教諭の先生から私では気づくことができないご指摘をいただきました。食育指導は週に１回、月に１回と少なく、児童に定着させることが難しい中で、１回の授業で目標設定を明確にし、何度も確認することの重要性を学びました。普段の日常生活やよく食べるものを関連させた授業をするなど印象に残る授業をする工夫が大切だと思いました。

また、２年４組では日程になかったものの、最終日にスペシャル授業をさせて頂きました。１週間を通して、２年４組の給食風景を見ていて気になった「お箸の持ち方」など、担任の先生に授業内容を提案しつつ、アドバイスを頂き、テーマ決定をしました。担任の先生とお話しするなかで、教師は常に児童の事を一番に考えられていると感じました。栄養教諭はTT形式が多いので、先生方とのコミュニケーションや情報収集が大切だと感じました。

給食時間は２、４、５年生と一緒に食べる機会があり、各学年で給食への捉え方が様々でした。
低学年でも「地産地消」という言葉を知っており、「世界では食べたいけど食べられない人たちがたくさんいる」という話を自らする児童もいて、とても興味深かったです。

教育の現場に入らせていただき、まずは「児童の手本」でないといけないと思いました。小学校に行かせていただいて、児童の吸収力、観察力に驚きました。だからこそ、児童の前に立つ人間として責任感を持ち、児童の成長に関わることの重要性を感じました。また、教師として指導の難しさを感じるとともに、児童が笑顔で話しかけてくれることから、やりがいや喜びを感じることができました。

この実習を通して得た経験や課題は、大きな財産となりました。これらを糧に、さらに向上心を持ち、今後に生かして行きたいと思います。最後になりましたが、とてもお忙しい中、温かく見守って頂き、そしてご丁寧な指導をしてくださった先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

# 栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科　４回生
政　谷　沙央里

５日間という短い期間でまた、栄養教諭の先生がいらっしゃらない中で実習をさせて頂きましたが様々な経験ができるよう配慮して頂き、多くの貴重な経験ができました。

私は母校の中学校で実習を行いました。中学生にはどのように接したらよいのか不安でしたが、学級活動や日誌、清掃時間を通してコミュニケーションをとることができました。こちらから積極的に接していくことが大切だと感じました。また、１年生で２回、２年生で１回授業をさせて頂きましたが、クラスや学年で授業の受け方も異なり、うまく対応できず苦労しました。同じ授業をしてもクラスや学年が違う生徒が集まっているため、一つとして同じ授業はないのだと感じました。授業は１回１回が緊張で何度も練習をして自信をつけるようにしていました。しかし、予想もしていなかった答えが返ってきたりと、戸惑うことばかりで授業を進めるのに必死でした。一方的に話をするのではなく、生徒が自ら考え、楽しみながら学べるように、グループワークをしたりワークシートを使いました。黒板もできるだけ見やすく、最後に復習できるよう工夫しました。生徒も積極的に授業に参加してくれて嬉しかったです。

研究授業のほかに、学級を持たせてもらった２年３組で「中学生の栄養とスポーツ」についての授業を行いました。地区大会が近いということもあり、大会前日や当日、普段の食事で心がけることなどを話しました。生徒も興味を持って聞いてくれている様子で、大学４年間で学んできたこと、やりたかったことがこういう形で実現でき、子どもたちのサポートをしていきたいと思う気持ちが一層高まり、これから頑張ろうという気持ちになりました。

最終日は調理場に入らせていただき、調理の手伝いや配膳、給食時間の見回り、校内放送も体験させてもらいました。栄養教諭は教職員としての役割と栄養士としての役割があり、また保護者や地域の方との関わりもあり、多くの役割を担っていることがわかりました。

成長期である中学生は給食も本当に大事であると思います。給食時間に見回ったり、放送を入れることで食に興味を持ち、食の大切さをわかってもらえるよう働きかけ、そしてなにより安心して食べられる給食を提供することが栄養教諭の役割だと思いました。この実習を通してさらに栄養教諭に興味を持ちました。食を通して生徒の成長を見届けられるということは大変やりがいのあることだと感じました。

５日間という短い期間でしたが、大学ではできない貴重な経験をさせて頂き、大変勉強になりました。本当にありがとうございました。この経験を将来に活かしていきたいと思います。

# 観察実習レポート

教育学科　３回生
中　村　晴　香

## １．スクールサポーターとしての活動から得たもの

### ①児童との関わりから得たもの

何事にもやる気が見られない子どもがいました。「これ、やってみない？」と声をかけても机に顔を伏せてしまい、教科書でさえ開こうとはしませんでした。私はまずこの子との信頼関係を気付こうと思い、私から積極的に話しかけました。また、その子に少しでも成長したところがあれば、すぐに褒めました。すると、その子から自分が頑張ったことを見せに来てくれるようになり、今では宿題も必ずやってきて、自分から積極的に活動に取り組んでくれるようになりました。このことから、子どもを認めることの大切さを学びました。

### ②教師との関わりから得たもの

先生はだめなことをすれば叱り、いいことをすれば褒めていました。それはどんな小さなことでもです。最初は少し厳しすぎるのではないかとも感じていました。しかし、それではだめなのだと分かりました。小さなことでもこれくらいならと見逃してしまえば、子どもはこの先生だったら平気だと思ってしまいます。だからこそだめなことはだめ、しかしどんな小さなことでもよいことをしたり、成長したところがあれば必ず褒めてくれる先生こそ信頼されるのだと感じました。

### ③学校という組織との関わりから学んだこと

中には日本語が全く話せない子どもいます。そんな子どもたちのための学級があり、日本語の授業についていけない子どもたちが、日本語を学びます。また、その子たちの国の言語で朝のあいさつ運動を行ったりと交流をたくさん取り入れています。各学校の特性に合わせた取り組みがされているのだと感じました。また、日本語を話せない保護者も多いため、保護者あてのプリントは在籍している子ども全ての言語に訳したものを用意されていて、子どもだけでなく、保護者への配慮も忘れてはいけないと感じました。

## ２．特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

担当したクラスは２年生でしたが、自分から出来ることを考えて行動する子どもたちの姿に驚きました。このクラスでは給食台や牛乳バケツの用意などの係がありません。なぜなら気づいた人がそれをするのです。しかも決まった人がやっているわけではなく、いろんな人が交代でやったり、協力して二人や三人でやったりしていました。担任の先生は自分たちで考えて行動できるようにわざと係を決めていないとおっしゃっていて、考える力や相手を思いやる力を伸ばすことのできる素晴らしい学級経営だと感じました。また、先生は子どもたちをたくさん褒めていました。それにより、子どもたちは、先生は見てくれているのだと感じ、もっと頑張って取り組んでおり、私もこんな学級経営ができたらいいなと感じました。

3．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

活動の１回１回がとても勉強になり、将来教師になったら生かしたいことばかりです。特に子どもへの言葉かけの大切さをこの１年で知ることができました。教師が発する１つ１つの言葉が子どもたちに大きな影響を与え、それが教師と子どもとの信頼関係まで左右するものであることを学び、将来教師になった時、子どものやる気が湧いてくるようなそんな言葉かけができればいいなと思います。また、話し方一つで子どもの集中の持続も変わってくることを知り、抑揚をつけて話したり、簡潔に分かりやすく話したりなどの話し方も、先生方の指導を見ることで学ぶことができたので、必ず教育活動に生かしたいです。

4．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

授業があればどうしてもボランティアにいけないということです。私は３回生で授業は少ないですが、学科の授業はなくてもその他の資格の授業があります。一日に１コマだけの授業があり、１つの曜日に授業をまとめて頂ければもっと参加しやすいと思います。

5．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

子どもが成長したと感じた時です。答えは書けているのに発表が恥ずかしくて出来ない子がいました。どうにか自分から発表してもらいたくて、「いい答え書いているよ。」等の声かけや、手をあげかけてやめたときには「なんでやめるん。聞きたかったのに。」と声をかけたりしていました。するとある日こっちをちらちら見ながら手を挙げてくれました。そして発表できたことを褒めると嬉しそうに笑った顔が本当に嬉しくてとても印象に残っています。

6．その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

クラスに１人特別支援学級の子どもがいました。その子は算数以外をクラスのみんなと共に学んでいますが、知らないものに挑戦することを異常に怖がったり、分からない事があるとすぐにパニックになってしまいます。しかしクラスのみんなはその子に「大丈夫だよ。できるよ。」「すぐおわるよ。」と声をかけたり、気づいた子が落ち着かせてあげたり、特別支援学級に迎えに行ってあげたりとクラスみんなでその子を大切にしていることが伝わってきました。私も将来学級をもち、配慮を必要とする子どもがいればそのような学級を作りたいと考えます。

# 観察実習レポート

教育学科　３回生
村　上　　礼

## １．スクールサポーターとしての活動から得たもの

### ①児童の関わりから得たもの

子どもたちは一人一人違った能力・適正、興味・関心をもっている。また、生活背景も様々であり、その上、いろんな気持ちや願い、たとえば「私の気持ちを分かってほしい」などの思いをもって登校してきている。授業を進めるに当たっては、子どもたち一人一人の特性・気持ち・願いなどを的確に把握し、それらを踏まえて、一人一人の既習事項・スキルの定着状況を確かめながら、授業を作っていかなければならないということを学んだ。

### ②教師との関わりから得たもの

先生方との関わりを通して、授業準備の大切さを学んだ。先生方は、毎日様々な仕事がありお忙しいにも関わらず、授業の準備をしっかりとされていた。授業の準備がしっかりとできていると、子どもたちはその授業に興味・関心をもち、積極的に学ぼうとしていた。毎時間の授業の教材を工夫することで、子どもたちの授業への関心を高め、学習内容の定着を図ることができるということを学んだ。

### ③学校という組織との関わりから学んだこと

教員全体で子どもたちを見守り、育てていくことの大切さを学んだ。一つのクラスで一人の教師が子どもを抱えていくことを基盤としながらも、同時にクラスを越えて、教員全体で子どもたち全員を抱えていく。そうすることで、一人の子どもを取り巻く教師のまなざしが増え、子どもを多面的に捉えることができることが分かった。

## ２．特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

いろいろな先生方の姿を見せてもらうなかで、学級経営において大切なことをたくさん学んだ。まず１つ目は、朝必ず笑顔で教室に入ること。明るく元気に挨拶をすることで、子どもたちも元気になって気持ちよく１日を始められる。そして２つ目は、朝の会の先生のお話で、明るくなれる楽しい話をすること。朝の会では、連絡や注意しなければならないことをしっかりと話すことも必要だが、褒める話、感動した話、驚いた話など、少しでも子どもたちが笑顔になれる話をして、楽しい雰囲気を作ることが大切だと学んだ。そして最後は、一人一人の子どもを大切にすること。子どもにとって学校が楽しく活気あるものになるか、暗く萎縮したものになるか、しっとりとしたものになるか、荒れたものになるか、それらは学級担任のあり方に関わってくると言っても過言ではない。学級担任が子どもに決定的な影響を与えているのは、学級担任の子どもに対する態度ではないかと思う。教師の学識、指導技術、教育経験はもちろん大きな影響を与えるが、学級担任が人間的な関心と愛情をもって一人一人の子どもに接するか、それとも無関心であるかによって、学級の子どもは大きく違ってくるということを学んだ。

3．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

教師になったとき、先生方から学んだ、「叱ることよりも褒めることを大切にする」ということを常に意識して教育活動に取り組みたい。褒めることは叱ることよりも難しく、上辺だけの褒めでは子どもたちにすぐに見抜かれてしまう。先生方は、細かく児童を観察し、教師の手伝いをしてくれたことや、友だちを助けてあげたことなど、ほんの些細なことでも褒めておられた。また、よくできている児童を褒めることで、他の児童も良い行いをたくさんしていた。しっかりと褒めることは、子どもたちの「やればできる」という自信と、次への挑戦意欲を育てることができるので、私も褒め上手な教師を目指して頑張りたい。

4．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

私は１年生に入らせてもらっていたのだが、担任の先生から「〇〇くんに付いてもらってもいい？」と言われ、ほとんどの時間その子の横にいて勉強を手伝ったり、別室で一緒に勉強したりしていた。しかし、時間の関係等で、担任の先生とお話する機会がほとんどなかったため、その子がどのようなことに困っているのか、どのような支援をすればよいのか、などあまり分からないまま支援をしていた。先生方は本当にお忙しく、なかなか話す時間がとれないことは重々承知しているのだが、少しでも話すことができたら、スクールサポーターも活動しやすくなるのではないかと感じた。また、活動報告書が返ってくるのが数か月先なので、先生方が書いてくださったコメントをすぐに読むことができないのが少し残念だなと思う。

5．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

運動会に向けての練習が一番印象に残っている。１年生は全員でカンフーを発表するので、９月は毎日のように練習していた。私は週に一回行かせてもらっていたのだが、最初の練習は、左右どちらの腕を出すのか、どの方向を向けばよいのか、大人の私でも覚えるのが大変なくらい難しく、子どもたちの動きもバラバラだった。しかし、次の週、また次の週と、練習を見せてもらうたびにどんどん上手くなっていた。そして、運動会前の最後のスクサポの日には、私に練習の成果を発表してくれた。音楽に合わせて、腕をピシっと伸ばして頑張っている姿は本当に格好良くて、一生懸命練習を頑張ったことが伝わってきた。たった１ヶ月で子どもたちはこんなにも成長するのだなと驚いたとともに、とても嬉しい気持ちになった。

6．その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

私は今年度、母校の小学校に教育実習に行かせてもらった。実習が始まる前は緊張したが、子どもたちとの関わり方に関しては全く不安な気持ちはなかった。それはやはり、スクールサポーターを経験していたからだと思う。私は１年目も２年目も１年生担当で、実習でも同じ１年生担当だったので、戸惑うことなく自然に話をしたり、遊んだりすることができた。授業実習も、スクールサポーターで１年生のいろんなクラスの授業を見せてもらっていたので、授業の流れや子どもの反応をイメージしやすかった。スクールサポーターは、子どもたちとたくさん関われて、いろいろな先生の授業を見て学ぶことができるので、教員を目指す人はぜひ経験しておくべきだと思う。

# 観察実習レポート

教育学科　３回生
矢　部　こころ

## １．スクールサポーターとしての活動から得たもの

### ①児童との関わりから得たもの

子どもはよく教師を観察して、判断しているということを感じました。低学年では、あまり見受けられませんが、高学年になると「この先生だから、話してても大丈夫」や「この先生は怒ると面倒だから、話聞いとく」という子がいたりします。子どもは、無意識のうちに行っているのかもしれませんが、線引きをしっかりしていないと子どもになめられてしまうなと思いました。また、なめられるのと慕われるのは、全く異質なのだということも感じました。普段、私にだけ口が悪く何度言っても直らない子どもがいますが、私に元気がないときには「なんかあったん？」と声をかけてくれたり、自分がわからないときは「解き方教えて？」と声をかけてきたりします。そんなとき、慕われていたのだなと感じました。さらに教育実習で１か月近く顔を見せられなかったときは、多くの子どもたちが「おかえり！」と言ってくれたのが、とても嬉しかったです。

### ②教師との関わりから得たもの

注意を徹底するということは、簡単なようで難しいことだなと感じました。しかし、徹底することで子どもたちの態度が天と地ほど変わるということも、よくわかりました。１年生の頃、甘えてばかりいたのに、２年生になり担任の先生が変わった瞬間、子どもたちの態度が激変しました。それは先生が辛抱強く、時間をきりながら子ども一人ひとりができるまで待つということや作業に入る前の説明を入念に行うことなど、さまざまな配慮が功を奏したのだと思います。また低学年は抽象的でなく、より的確で細やかな指示を出す必要性を学びました。特に学習規律については、これから生きていく上で、必ず基盤となることなので私も徹底したいと感じました。

### ③学校という組織との関わりから学んだこと

同じ職場で働いている限り、校長先生も教頭先生もみんな仲間なのだと感じました。誰か一人でも困っている先生がいれば、先生全員で手を組み解決に導こうという姿勢を感じました。また学期ごとに、それぞれの学年の様子を会議で報告することにより、学校全体での共通理解を深めていました。さらに私も一教師として見てもらえていることで、ほかの先生方との報告・連絡・相談がしやすかったです。やはり一人では難しいことは、全体で協力することが大切で、その第一歩として報告･連絡･相談は怠れないと感じました。

## ２．特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

近年は通級学級に２・３人は特別な配慮を有する子どもがいると言われていますが、その子たちと他の子たちの関係をどう取り持つかはとても難しいことだなと感じました。配置校では、去年まで特別支援学級である「わかば学級」があったのですが、今年からは通級学級が６クラスという編成にな

りました。私がサポーターとして入っているときは、適度に目があるのであまり心配ないのですが、私がサポーターとして入れないときの、対応は大変だと思いました。あまりその子ばかりを叱りすぎると、「また、○○ちゃん」、「どうせ、○○くん」と子どもたちに偏見をもたせかねません。しかし、そこは流石クラス担任の先生で、その子の得意なことや興味のあることで褒めたり、気をひいたりしてほかの子が違和感なく作業できるように配慮していました。またしっかり行動の理由を問いただすことで、その子のもやもやを晴らし、且つ次の活動へと活かしていました。

3．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

去年に引き続き、授業の様子を神戸市に提出するレポート以外にもメモしているので、それを参考にしていきたいです。また今年度は、教頭先生からのアドバイスで様子だけを記録するのではなく、「自分なら、こんなときどう対応するか」についても考えながら、メモに取っています。実際、このメモは少なからず、教育実習で活かすことができました。こうしたら、子どもはこんな反応をするだろうなと予測したり、ここではどう言葉かけをするのが適切かなど、何もない０の状態で教育実習に行くより、内容の濃いものにできたように思います。

4．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

配置校に１人しかいないときの負担は、やはり大きいかなと感じています。ほかの大人数で行っている配置校に比べるとノルマが多く、２月も来てほしいと言われているのですが、自分の勉強もあるので、ノルマを達成させるのでいっぱいです。またノルマを達成するためだけに、来ているのかと思うと何となく子どもたちに後ろめたさも感じます。

5．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

トライやるウィークで中学校から、何人かが職場体験をしに来たのですが、１年生の先生から「当たり前やけど、トライやるウィークの生徒さんとスクールサポーターの矢部さんでは全然違うよね」と言われたのが、とても印象的です。トライやるウィークの学生は１年と２年にそれぞれ１人ずつ配置されていて、私も一緒にサポートをしていたのですが、１年生の担当の子が平気で給食を減らした上に残したときには、度肝を抜かれました。１年生は特に食育という面で、私なりに給食の時間を大切にしていて、子どもたちにも示しがつくようにいつもおかわりも率先していただけに言葉も出ませんでした。当然、普段の私の姿を見ている子どもたちは「先生が給食残してる！」「神様に怒られるのに！」といってトライやるウィークの生徒さんを囲んでしまいました。担任の先生は事務作業に追われていて、状況が把握できていないようだったので、そこは私が「給食残したらあかんのやったら、みんなもおかわりしにいかな神様に怒られてまうよ～！おかわりできんのやったら、もう座っとき！」と一喝し収集させました。やはり、トライやるウィークにくる生徒さんの多くは、母校へ遊びに来たというような感覚で来るからなのか、態度や言葉遣い、そして子どもとの接し方に、少し口を挟みたくなるような場面が多々ありました。私も教員という仕事に興味をもったきっかけがトライやるウィークだったので、あの時に比べたら成長したのだなと実感しました。

# ボランティアを通して学んだこと

教育学科　３回生
濱宇津　有　那

私がこの一年間保育所でのボランティアを通して学んだことは、目の前の子どもの気持ちを考えることと関係性の大切さです。

対象児は１歳、２歳、３歳、４・５歳混合クラスと順番にすべてのクラスに入らせていただき保育補助をしました。初めは、お昼寝後のお迎えが来るまでのおやつや自由遊びの時間でした。子どもたちは「お母さんが何時に今日は来る」と私に教えて、待ち遠しく時間を気にしている様子でした。お母さんが迎えに来てくれた喜びや、また友達が帰る姿を見てそわそわしている子どももいました。そうした子どもたちの気持ちに立ち、「もうすぐ来るかな」と気持ちを受け止めている保育者の言葉で子どもは安心し過ごしていました。

慣れてきたころには、午前の設定保育時間内もボランティアに入らせていただきました。

夏はプールの時間、体調面などで水遊びができない子どもたちと室内で遊んだり、プールのそばでみんなを一緒に見て過ごしました。「プールに入って一緒に遊びたい」という気持ちと「できない」という事実の中で葛藤している子どもたちの気持ちを受け止め思うと、なんと声をかけていいものか悩みました。次の意欲を高めるため、その時の私は「次はみんなと一緒に遊ぼうね」と声をかけることしかできませんでした。先生たちは、入れなかった子への配慮、また水が苦手な子が楽しめる遊びをたくさん工夫していました。ままごとで使うエプロンやハンカチを大きなたらいで洗濯するという遊びでした。石鹸で泡を作り、泡の感触や水の感触を楽しみ、いつしか子どもたちはみんな笑顔で水遊びを楽しんでいました。

また、自由遊びのなかでは毎日のようにケンカやもめごとが起きました。年齢に応じた介入の度合いや言葉かけに戸惑うことも初めは多くありました。しかし、子どもとの関わりの中で距離がどんどんと縮まり保育者の子どもとの接し方や子どもに願うねらいがわかるようになってきました。子どもの自立に向けた保育者としての援助や一人ひとりへと向けた言葉の選び方があること、アプローチの幅を実際の現場を通して知ることができました。徐々に子どもたちも私の名前を覚え、呼んでくれるようになり、ある日言われた一言がありました。「お姉ちゃんは木曜の午後と金曜の朝に来ることが多いよね。また、遊ぼうね。」とある子どもに言われました。そこで気付いたことは初めと比べ自分の子どもと関わる視点が変わったことと子どもはそれに気づき応えてくれるということでした。子どもの中で印象に残り関係を築いていくことの大切さを学びました。

そして最後に、こうしてボランティアを受け入れてくださる環境にとても感謝しています。これからもこの学んだことを活かして、子どもに寄り添いともに、これからも成長していきたいと思います。